

ランチョンミーティング

UniBio Press 担当企画ランチョンミーティング

2023年9月8日(金) 12:00-13:00
琉球大学共通教育棟2号館E会場(2-301教室)

研究成果を論文として出版する上で知っておくべきこと

—書き方、雑誌選択、評価—

研究成果の発表方法として、論文が重要視されていることは言うまでもありません。しかし、論文の書き方、投稿する雑誌の選び方、出版した業績の評価について、疑問に思っている方は多いのではないのでしょうか。原稿を掲載が容易な雑誌や(かつ)Impact Factor(以下、IF)が高い雑誌ばかりに投稿すればよい、と思っていないのでしょうか?また、論文の出版やその後の維持には費用が必要となりますが、その費用負担の仕組みは近年状況が目まぐるしく変化しています。このような仕組みを理解しないまま投稿先を選択し特定の出版社に利益をもたらすことで、長期的には十分な資金がない者は論文出版も購読もできない世界が構築されるかも知れません。その一方で、若手の方は常勤職を得るための厳しい競争にさらされており、業績を上げるために余裕がないのも事実です。本ランチョンセミナーは、論文の基本的な書き方と出版の仕組みに関する知識を普及し、論文という共有の財産を持続的に生産するための今後の仕組みについて議論したいと思います。これから論文を書こうとする若者や、研究者の採用に関わるような管理職など幅広い方々と議論を深めたいと思っています。

論文を書くことは楽しい

佐藤 淳(福山大学・Mammal Study Editor-in-Chief)

皆さんは今、小さくもまだ知られていない哺乳類の謎を解明しようとしています。その研究は、世界と未来に向けて発信されることで、多くの人の興味の対象になるに違いありません。論文と聞くと、辛く修行のように感じる人が多いかもしれませんが、そもそも論文を書くことは客観的にデータとその意義を伝えるとともに、自分を自由に表現することでもあり、とても楽しいプロセスなのです。誰が研究しても同じ結果が得られるのがサイエンスですが、皆さん以外の人には皆さんのような表現はできないのです。この講演では、論文の意義と書き方を含めて、論文を書くことは楽しいということを伝えたいと思います。

誰が論文の出版と維持の費用を負担するのか？-学術出版の近年の世界情勢-

飯島 勇人（森林総研・UniBio Press 担当）

近年、学術出版業界には目まぐるしい変化が起こっています。IF の誤った理解に基づく IF 至上主義の横行、少数の大手出版社による論文のパッケージ販売、Open access 出版社の激増などです。その結果、図書館は年々増額される購読料の支払いが困難になり、論文を執筆する著者も OA を希望する場合多額の出費を求められるようになりました。その一方で、2025 年から公的資金を用いた研究成果は原則として即時 OA が必須という方針が示されています。そのため、現時点ですでに、お金がなければ論文を閲覧することも、OA 論文を出版することも困難な世界が構築されつつあります。このような学術出版の現状を紹介し、今後何を考えて論文の投稿先を選ぶべきなのかについて説明します。

討論：どのような論文が評価されるのか？

上記演者＋パネリスト数名＋参加者

この討論では、若手研究者、研究者の採用に関わるような管理職の数名にパネリストとしてご参加いただき、それぞれの立場で業績としての論文をどう見ているのか議論します。討論で取り上げてほしい話題がありましたら、事前に <https://app.sli.do/event/iXUXHsuosNbYQAtRuhSC3Z> に書き込んでください。もし、すでに書き込まれた質問でご自身も聞いてみたい質問があれば、「いいね」を押してください。「いいね」が多い質問は、取り上げる可能性が高くなります。

国際交流委員会企画ランチョンミーティング

2023年9月8日(金) 12:00-13:00
琉球大学共通教育棟2号館F会場(2-305教室)

若者よ、さあ海外に飛び出そう！

—若手会員に聞く海外調査・学会体験談—

COVID-19が勃発してから3年が過ぎました。この間、対面での研究交流は著しく制限され、海外渡航は禁じられ、皆が閉塞感を感じながら研究活動を進めてきました。多様なオンラインツールが現れ、日本に居ながらにして国際会議に参加することも可能になりました。多くの研究者は、新しいツールの便利さを享受しながらも、ディスプレイ越しにかわされるやり取りだけでは、どこか物足りなさを感じていたはず。1年ほど前から海外渡航がようやく再開され始め、海外での研究活動や国際学会への対面参加が再び活発になりつつあります。この3年間、海外での経験を積む機会が得られなかった学生や若手研究者の皆さん、さあ海外に飛び出して！ …と言われても、若い皆さんの中には色々な心配や疑問が渦巻いているかもしれません。本企画では、3名の若手研究者・学生の講演者を招き、海外での研究滞在や国際学会参加の体験をお話しいたします。講演後には、講演者に直接質問できる交流時間も設ける予定です。本企画を通じて、一人でも多くの若者に海外への研究渡航を志してもらえたらと思います。

世界中の哺乳類研究者が集まる国際学会に突撃して発表してみた

遠藤 優（北海道大学大学院・博士後期課程）

コロナ禍に伴うオンラインへの移行により、国際学会など国外での研究活動の経験がない学生や研究者も多いと思います。かくいう発表者も、本稿執筆現在(2023年5月3日時点)、国外での研究活動経験は一切ありません。そんな人間が現地の国際学会で発表したら、一体どうになってしまうのか？本講演では、2023年7月に開催される国際哺乳類学会に向けて、分からないながらも事前に準備したことと、実際の活動の様子や感想を共有したいと思います。果たして無事戻り、当日予定通り講演できるのでしょうか。

大型肉食動物のフィールドワークへ

稲垣 亜希乃（東京農工大学大学院・博士後期課程）

2022年末から約3ヶ月間、大学の海外派遣制度を利用してアメリカのイリノイ大学とカリフォルニアのサンタクルーズに滞在しました。人生で2度目の海外です。研究室では論文

執筆に励みつつ、カメラトラップ調査やピューマの生態調査に参加しました。本講演では、今回の研究滞在の振り返りと自らの心境の変化について紹介したいと思います。

海外の研究仲間を増やすコツ

池田 悠吾（京都大学総合博物館・研究員）

わたしはこれまで“国境”という概念を持たないコウモリ類を対象に、海外での研究活動を行ってきました。その中で多くの海外研究者と知り合ってきましたが、いつも実りあるわけではありませんでした。本講演では、東南アジアでのフィールド調査やヨーロッパでの標本調査、米国での国際学会参加などの体験談を交えながら、わたしが体得してきた国境の垣根を超えた研究仲間を増やす“コツ”をみなさんと共有したいと思います。